
魔法先生ネギま！ 例のやつがやってきた？

ハテナーナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ 例のやつがやってきた？

【Nコード】

N8312X

【作者名】

ハテナーナ

【あらすじ】

麻帆良学園にとある人物がやってきた

そいつは裏では有名な最強防御魔術師

とりあえずキャラ設定その1（前書き）

映画化記念（一ヶ月以上経過しているが）なので投稿

とりあえずキャラ設定その1

八樹^{はちじゅ} 19歳 誕生日 11月3日

本編の主人公 無詠唱で魔法を使えるが本職はあくまで剣士

近衛木乃香と桜咲刹那とは知り合い関係 何故そうなったかは後々

魔法学校に通っていたが五ヶ月で中退

その後独学で魔法を覚える

だが中学生になってから6年近く魔法を封印したためかなり弱くな
った

出身は岡山県 瀬流彦先生とは結構仲がいい

ちなみに魔法は777個覚えているが600個はまったく役に立た
ない魔法である (たとえば白紙を一瞬で黒くする魔法とか)

ハテル・テル 誕生日 10月29日

こんな名前だがそれでも日本人そして八樹の幼馴染

独学で魔法を覚えたある意味すごいやつ

かなり強力な炎魔術師でエヴァンジェリンに匹敵する強さを持つ

魔法使い連合会議？（前書き）

P C 不調のため短め

魔法使い連合会議？

世界樹前 六時ごろ

瀬流彦SIDE

え〜っと今日から配属される魔法使いが一人きたみたいだから

だけどこんな時期に珍しいね もうすぐ期末テストが始まるのに

まあ僕はたいした魔法はつかえないけど 配属される人はかなりすごい魔法使いらしい

ちなみにここには今は人払いの札を貼っているから魔法関係者以外はだれもいない

「え〜 さてこの学園にやってきた魔法使いを紹介するかの」

学園長先生がやってきた つれてこられた人は僕の知り合いのようだね

「では自己紹介を」

「あ〜 あ〜 俺の名は八樹だ とりあえず宜しくお願いします」

彼の名前を聞いてみんなが騒ぎ出す そりゃあ彼は有名人だからね

特に桜咲さんが驚いていた　まあ彼女は八樹とは知り合いだったらしいからね

「では今日はこれにて解散じゃ」

学園長の言葉によって解散　人払いの札もなくなったようで生徒たちが
わらわらと集まってきた

学園長室

八樹SIDE

ここは学園長室　何故呼ばれたかって？　大学生生活を楽しんでいるときに突然

「この学園で教師をやってくれんかの？」　って携帯に電話がかかってくるんだぜ？

おまえはどこで俺の携帯の番号を知ったんだよ

ちなみに学園長室には俺と学園長そして高畑先生の三人がいる

高畑先生は魔法界ではかなりなやつだったらしい

「して八樹君には2・Aの副担任をやってもらおうとする」

「まあかまいませんよ」

「あと何か得意科目とかはあるかの？」

「国語以外なら基本得意ですが 教えるとなると数学以外は無理ですね」

国語以外は毎回満点なんだよな 国語は半分くらいだが

「なら数学の教師になってもらうかの」

「了解」

こうして俺は数学担当の2・A副担任となった 高畑先生は空気だったけど

初授業？

八樹SIDE

ときはとんで授業当日

「いよいよですね」

「まあそうですね 変わったクラスだと瀬流彦先生から聞きましたし」

ちなみに中等部女子2-Aのやつらに知り合いは少しいるんだよな

ちなみに一緒にきてくれたのは高畑先生 Thank you だな

9

いよいよ教室 ドアには黒板消しが

「ハハハこんな古典的な罠があるとはな……………」

隙間から覗いてみると明らかに黒板消しが頭に落ちてそれで動転してロープでこけさせてバケツに頭が入って教卓までくるくるなつてぶつかり生徒に笑われるか……

ひどいクラスだなおい！

「まあ こういうクラスだからねウチは」

とりあえず黒板消しは取っておいて

ガラガラガラー

龍宮真名SIDE

噂の魔法使いの教師が来たか………

黒板消しの罠を回避しロープをジャンプでかわしそのまま教壇につくとは

なかなかやるようだな

「あゝ この件については置いて自己紹介をしておこう
名は八樹 一応数学教師となった このクラスの副担任であって教師免許はない 以上」

そんなことを言っているのか……？

「質問はSHR内までなら聞いてやる 今のうちに聞いておくことだな」

そういつた瞬間クラスは騒がしくなった

先生はどこからやってきたかとか

彼女はいるのかとか

好きな食べ物とか嫌いな食べ物とかなどなど

ま、私は興味はないがな

八樹SIDE

チャイムが鳴り とりあえず俺は教室を出る 一時間目は高畑先生

が授業だからな

俺は2 - Fだけど 2 - Aは五時間目だな 授業はこの二回だけ
楽だな

明日は全時間だけだな

ま、がんばるか

二期期末テスト（前書き）

次回くらいにネギ登場予定

そして次回くらいから真面目に書こう

二学期期末テスト

八樹SIDE

時は飛んで 期末テスト一週間前

予想通りだがみんなやる気なし

ついさつき小テストを行い採点が終わった

結果は一位は超鈴音の100点

二位は葉加瀬聡美の99点

三位は雪広あやかの98点

四位は宮崎のどかの96点

五位は朝倉和美の95点

六位に近衛木乃香の92点

ここまでが九十点台

ちなみにワースト6は

桜咲刹那とZazie Rainydayの42点

ギリギリ欠点じゃないレベルだな

のこりはバカレンジャーと呼ばれている5人衆

一番悪いのは神楽坂明日菜だが

まあこいつは高畑先生の補習目的でわざと悪い点数を取っているとか……

それはいいとしてこのままだと最下位確実

ま、最下位でも怒られたりはしないと思うし気楽にやろう

「今更だが　せめて最下位脱出のため今からやる小テストで60点以下のやつは放課後鬼の補習を行う
文句は聞かんぞ！」

ええ〜！？と上がる声　そう言うやつにかぎって勉強ができないのが普通だが

成績優秀の朝倉とか一応合格レベルの鳴滝姉妹もええ〜！？といていた

お前らレベルなら合格できると思うから大丈夫だ

「なら配るぞ 結果は高畑先生配ってくれる」

そうして配る

ちなみにみんなのテスト中に俺は何故か社会のテストを作成

担当の先生が俺と入れ替わりで辞めやがったから変わりに俺が作ら
されるハメに

そして放課後

意外と合格したようで残りはバカレンジャーの5人衆だけだった

「えっと これより補習を行う 二十点満点のテストで八割以上の点数で合格だ できるまで付き合っからな」

「えーっと先生！」

「なんだ？ 佐々木よ？」

「八割って何点以上のことですか？」

割合くらいわかれよ 小学生レベルだぞ！？

とりあえず言えることは こいつらを底上げするのは大変なことだことだ

その後期末テストが行われてからうじてワースト3位に滑り込んだ

二学期期末テスト（後書き）

次回からは真面目に……………かけると思う

ネギ登場

八樹SIDE

2 - A天井裏

三学期開始早々天井裏にいる2 - Aの副担任

何で天井裏にいたって？

どうせ2 - Aでは罨が張られるんだし

新米教師にかかってもらおうという考えだ

たしかサウザンドマスターの息子だったはず

ちなみに冬休みの間は生徒と仲良くなる努力をした

一部以外は仲良く話せるレベルに

あとは遠当での練習だな がんばって俺の知り合いレベルまで練習した

覗くために天井に穴を空けた 後で直すけど

「失礼しま……」

来たようだ しづな先生の同伴で

そして黒板消しの罨がやってくる

ポフツ 一瞬止めて結局かぶってしまったようだ

「あらあら」

「ゲホゲホ いやーあはは なるほどゲホ ひっかかっちゃったなあコホ」

そして第二の罨 「へぶっ!？」 ロープでこけて「あぼ！」 水入りバケツが落ちて「うわあああああ」 矢が飛んできて

「ギャフン」 教卓に激突と

『『『アハハハ!!!』』』

クラスの大半が笑っていた

「えっ？」

「あれ？」

ちなみに新任教師は数えて10歳だったはず

「えーっ！ 子供!？」

「君、大丈夫!？」

「ゴメン！ てっきり新任教師だと思って！」

こいつが新任教師なんだけどな

「いいえ その子があなたたちの新しい担任よ 八樹先生は副担任のままだけど

とりあえず自己紹介をしてね ネギ君」

「ハ、ハイ」

たしかこいつはネギ・スプリングフィールドで得意魔法は風だったはずだ

「え、えと あの……ボク……ボク……」

今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりました
ネギ・スプリングフィールドです

3学期の間だけですけどよろしくお願いします」

魔法と言いかけたことに関してはスルーする

「キャアアアア！」

「かわいい！」

一応歓迎されてるようだ

ネギ歓迎会（前書き）

そろそろ魔法を出さないとな

ネギ歓迎会

八樹SIDE

とりあえずネギ先生の授業はg d g dになった

そしてネギ先生の歓迎会用のクラッカーを買いに行かされた

生徒にパシリされる教師とか聞いたことないぞ

一応買ったからいいけどさ

「ほらよ 買ってきたぞ」

「サンキュー」

そして一部の生徒にタメ口で話されるようになった

ちなみに今のは明石裕奈だけど

ちなみにネギ先生はさっき見たし もう来るだろう

「あとちよつとで来ると思うから準備しとけよ!」

『『『おおー!!--!!--!』』』

数分後

「早速実行よ 荷物とつてくるからちよつとそこで……」

何を実行するんだよ？

『ようこそ！』

『ネギ先生！』

ようやく主人公であるネギ先生登場

「あ……そーだ 今日あなたの歓迎会するんだっけ…… 忘れてた
！」

「えー！！！」

えー！！！はこつちだよ 忘れんなよ大事なことにさ

歓迎会は順調に進んだ

肝心のネギ先生は高畑先生に読心術を使ってたようだが
読心術はきかないと思う あの先生

次の日の夜

t r r r r r r r r

「はい こちらは八樹」

『八樹が、ようやく倒したぞ お前の家の近くにいたドラゴン』

「おお やつとか サンキュー ハテル」

ハテルと俺のもう一人の幼馴染のJ・Mジェンソン・マルクスに上級種の龍を倒してもらった

最近俺の家（当然魔法世界の）に龍が大量にやってくるんだよね

というわけでこの二人を魔法世界に送り込んだ

冬休みに龍宮や刹那を連れて行ったんだけどまだいるようだな

ちなみにJ・Mは最上級の回復魔法を覚えているからあつちの世界では最強の治療師と呼ばれている

強さAのネギ先生レベルだけどね あいつ攻撃技ほとんどないし

ちなみに俺はS BでハテルはS C

『とりあえず しばらくしたら旧世界に戻るぞ』

「おお　いつぐらに帰れるか？」

『お前らの学校で修学旅行が始まるくらいの時間かな？』

「遅いな！？　おい！」

惚れ薬編？

放課後

八樹SIDE

そこらへんを歩いていたらネギ先生発見

声をかけようと思ったたら図書館探検部の三人が先に声をかけた

ちなみに宮崎のどかはたしか恥ずかしがりやだったが木乃香嬢によ
って俺は話せるようになった

ちなみにかなり離れているから会話は聞こえないので近づく

「ふう どーしょ——ん？」

何かが出てきたようだ あれはたしか魔法の素丸薬七色セット大人
用

「これさえあればホレ薬みたいなのが作れるかも！！」

惚れ薬は犯罪なんだけどな どうでもいいしほっておこう

数分後 学園の警備することに

そして2 - Aの教室を覗くと神楽坂によってネギ先生がホレ薬を飲んじやった

「ネギ君ってよく見るとなんかスゴクかわえーなー」

どうやら木乃香嬢が一番の被害者となった

「ちよちよつと何をやってるんですかこのかさん!？」

いいんちようが第二被害者になりそうだ まあこいつはもともと愛してるそうだからいいけど

「先生どうぞコレを……」

どこからか花束を出した

ちなみに何故か神楽坂には効かない

こいつアレがあるのか？

「はいぬぎぬぎしましょうね——」

「ああ——やめっ やめてくださいーっ!」

これがいわゆる自業自得というやつだな

そしてカオスになってきそうだから退却 とりあえず図書館あたりに

図書館前の扉

鍵がかかっているね

そしてネギ先生に先を越されてしまった

「きゃあっ」

転落？

「いてて だ……大丈夫？宮崎さん」

「「あ……」」

「よお 神楽坂よ 中が大変なことになってるよ」

「ええ！？ どんなことに!？」

「もうちよつとでキスするだろうな 惚れ薬の効果が切れるまで
ま、あの量ならあと少しでできれると思うよ」

「へえ 結構詳しいのね」

「そりゃあ 魔法使いだからさ」

「えええ！？」

「いや驚くことじゃないだろ？ ネギ先生だって魔法使いだし そ
れよりはやく助けてやれ」

遠当て練習（前書き）

オリジナル物語　そしてオリジナル技を使用

遠当て練習

冬休み中

八樹SIDE

俺はとあるやつらに言わなければいけないことがある

「ゴハア!？」

開始早々殴られた 遠当てで

こんなことできるのは俺の知ってるやつだと

豪徳寺か中村のどっちかだ

「おい！ だれだ今のは！ 豪徳寺か中村だって事はもうわかってるぞ」

必殺 影移動

「ほい 到着」

「おおい！？　どこから来たんだよ！？」

「というわけで　どっちがやった？」

「豪徳寺だったはずだが」

「ほうほうそうかそうか　なら覚悟しときな　烈空弾！」

俺の作った遠当てその4　命中率が高めだが大して強くない　ちな
みに8つ作った

「ぐほあ！？」

どうでもいいが何故こいつらとつるんでいるかと言つと

遠当てその8を製作中に中村の遠当てを食らってしまい2秒意識が
飛んだ

そして遠当て仲間ということで仲良くなった

「っ！ 痛えな 漢魂！」

「負けるかよ！ 砲劉霸！」

遠当てその1 威力重視のため 意外とあたらないが今回は当たった

「へえ やるねえ 昨日は命中率が格段に低かったのにな」

「修行してるんだよ ちゃんと」

こっちの一時間が向こうで一日になる別荘で

「というか明日ちょっと旅立つからそれを伝えたいだけだ よって
しばらくは練習に参加しない」

「おい マジかよ！」

遠当て練習（後書き）

八樹「第一回オリジナル技解説を始めるぞ！」

豪徳寺「おおー！！」

山下「おー」

八樹「ちなみにメンバーは俺プラスこの二人とゲスト一人だが今回は第一回だしまだあの女子たちとほとんど接触してないからゲストはなしだ」

山下「とりあえず遠当てはスルーして影移動の解説をしよう」

八樹「これはまあ 瞬動の下位技だな」

豪徳寺「影のないところからあるところにししか移動できないしオマケに夜はほとんどつかえないからな」

八樹「とりあえず今回は解説終了 中村や大豪院は後々に出ると思うよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8312x/>

魔法先生ネギま！ 例のやつがやってきた？

2011年11月17日17時41分発行